

日本国際ボランティアセンター／トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial&Error

No. 228



アフガニスタン・パレスチナ・イラク・国内

《特集》現場から考える平和構築

第Ⅰ部・活動からの報告

第Ⅱ部・3人トーク<壽賀 一仁 × 佐藤 真紀 × 高橋 清貴>

『生ゴミはよみがえる』<みる よむ き>

あなたの本当の気持ちを聞かせてほしい… <ひとりごと>

プロジェクトの現場から<アフガニスタン・ラオス・イラク・南アフリカ>

イラクへ届けよう! 1,000人イラスト大募集<国内広場>

JVC Japan International Volunteer Center

3月号

2003
March

<特集> 現場から考える平和構築



▲1月18日、戦争を止めようと世界中の人々が立ち上がった(東京・日比谷) 撮影/中井 幹雄

戦争と平和—。人間はいつまでこの問題をめぐって堂々めぐりをつづけるのだろうか。平和を願う人々の思いや運動は、何の効果もないのか。

アフガニスタン・パレスチナ・イラク・国内アドボカシー、具体的な地域やテーマを通して、「戦争と平和」に向き合っているJVCスタッフが、現実と対峙する中で考えた「平和づくりへの道」を語る。

..... (編集部)

第1部 活動からの報告

◎報告1へパレスチナ・イラク

子どもたちのまなざし



自画像を描いてくれたイラクの少女

●「絵を描く」という平和な空間

昨年九月、イラクの子どもたちと初めて出会った。いくつかの学校を周り、子どもたちに絵を描いてもらった。シンドバッドクラブ(児童館の子どもたちは、一週間通って

くれた。テーブルを囲んで自画像を描いてもらい、将来何になりたいかを聞いた。多くの子どもたちが医者になりたいと言っていたし、先生や音楽家や建築家と言う子もいた。

子どもたちは、色鉛筆を使って色とりどりの絵を描いてくれた。その才能に驚かされる。イラクはもともと芸術が盛んで、ヨーロッパで学んだ芸術家も多い。私は子どもたちと一緒にいる間、とても平和な気分になることができた。子どもたちが面白い絵をどんどん描いてくれるのをずっと眺めていられたからだ。

私たちが一九九八年より平和教育のための図書館活動が続けてきた、パレスチナではどうだろうか。図書館に行く。一時間もいれば、「さあ、そろそろ閉めなくては」と図書館の管理人が言ってくる。いつイスラエル軍がやってくるかわからないからだ。そのうち撃ち合いが始まってしまふ。私もパレスチナに滞在していたときは逃げ遅れたこともあったし、検問では、イスラエル兵に銃を突きつけられた。だから、子どもたちに絵を描いてもらおうと、いつも色を塗る時間などなく、逃げるようにして、子どもたち



パレスチナ・中東担当 佐藤真紀

の作品を抱えて帰るのが常だった。

バグダッドでは、そういった戦争の恐怖がない(ただし北部や南部では米英の戦闘機による空爆がある)。もし、戦争が始まったらイラクの子どもたちの絵も変わってくるだろう。色がなくなっていく。そんなことがあってはならない。

●子どもたちの「戦争NO!」から

今日本では、*CVP Pボランティアチームがスタートし、イラクキャンペーンを始めた。日本の子どもたちにイラクの子どもの描いてくれた絵を見せながら、戦争のことなどを話す。絵の中のイラクの子どもたちと友だちになったら、彼らが殺されるなんて許されぬことだと思おうだろう。子どもが声をあげたら大人もまじめに考える。かつてイスラエルの首相だったイツハク・ラビンは、孫に「どうして、あんなふうにはパレスチナの子どもたちを殺すの」と聞かれて、答えられなかった。殺すより対話によって平和をつくりだすことの重要性を孫から教えられたのだ。

ところが日本の子どもたちは、イラクやパレスチナのことなど何も知らない。それどころかガンジールのことも、広島で被爆して死んでいった少女、貞子の話も知らない子が多いのには驚く。戦争と言ってもぴんとこない。なかなか、子どもから声が出てこないのが今の日本だ。子どもたちが互いのことを伝え合う、思い合う。それをサポートすることも大切な「平和構築」であるはずだ。

(さとう まさき)

*CVP P =異なる国の子どもの描いた自画像が、パソコン上で合成して握手する。子どもたちが互いを思いやるきっかけづくりのプロジェクト

▼学校帰りの少女たち。彼女たちが学校に通い続けられるような国際社会の支援とは（ジャララバード）



この県で活動する二十のNGOが一時的に事務所を閉鎖した。イギリスのNGOのオックスファムは車で移動中に強盗に襲われ二台の車が強奪された。

人道援助、復興活動を進めるためには、強大な国軍を創設するまでの間、多国籍軍（ISAF）が地方に展

◎報告2 アフガニスタン 立ちすくむ平和

●米軍駐留Ⅱ治安維持の効果は？

平和構築という課題をアフガニスタンで実践することがどれほど難しいことか、最近ようやくわかってきた。アフガニスタンの「平和ではない状況」というのは実に複雑である。地方の軍閥は対立・抗争を繰り返して、戦闘がある度に民間人が巻き添えになる。モザイク状の対立の隙間で警察権の真空状態が生じ、物取り、強盗、怨恨絡みの殺傷沙汰が頻発。女性への人権侵害、地雷の脅威、テロ事件、麻薬栽培。

ここではすべてを語るができないので、この国の治安に圧倒的な影響力をもつ米軍の関与について述べたい。

復興計画がなかなか進まない理由に地方での治安の問題がある。一月はじめ、南東部のザブール県でNGOがたて続けに強盗に襲われ、



谷山博史
アフガニスタン事務所代表

開するべきだと援助関係者は主張する。多国籍軍がダメなら米軍が地方の治安確保にあたるのもやむをえないという人も多い。しかし私はこの議論には大きな落とし穴があると感じている。米軍のやり方こそが治安を悪化させる大きな要因になっているからである。

●攻撃が反撃を。泥沼の米軍事作戦

米軍はタリバンとアルカイダを駆逐するため地方のありとあらゆる軍閥を味方につけ利用してきた。今も掃討作戦で地方の軍閥を支援し、時には互いの対立をも利用して米軍の影響力を確保しようとしている。

一つだけ例をあげよう。パクチア県の前知事パツチャ・カーンは対アルカイダの戦争で米軍の尖兵として活躍した。昨年一月アメリカからの意向でカルザイ大統領はパツチャ・カーンをパクチア県の知事に任命したが、地元のジルガ（評議会）はそれに反対し、大きな戦闘になった。カルザイ大統領は任命を取り消したが、今度はカーンが新知事やカルザイ大統領に反旗を翻して度々戦闘を仕掛けた。今年の一月、米軍の仲介でカーンはカルザイ政権を認めると発表したが、実は昨年の九月まで米軍はカーンに武器を提供し支援しつづけていたことが明らかになった。似たような構図がJVCの駐在するナンガハル県でも存在している。米軍はすべてに優先して対テロ作戦を強引に進めてきた。それが対立を深め治安をさらに悪化させる。

米軍の軍事作戦は泥沼にはまっついているように見える。アルカイダやタリバン残党の掃討作戦で村を爆撃し、家宅搜索をし、強制逮捕をする。

このやり方にパシクトゥンの人々の反感が高まる。米軍が正体不明のグループの攻撃を受ける。その度に米軍は報復攻撃を仕掛け一般民に被害者が出る。そしてさらに米軍への反感が高まる……という悪循環が続いている。

●アメリカの軍事作戦十人道支援

アメリカは軍事作戦が一向に成果をあげないため、大きく方針を転換している。軍事作戦と人道援助の調整を任務とする暫定復興チーム（PRT）を全国八カ所以上に設置する計画で、すでにガルディズとバーミアンで活動が始まっている。これは米軍への地元民の反感をなだめると同時に、直接の人道援助活動やNGOなどとの連携を通して、より効果的に情報収集をすることが目的と思われる。しかし、この計画は昨年十二月にオスロ会議で合意された*新援助調整システムを完全に無視している。

米軍はNGOの名前を騙って情報収集や暗殺計画も行なっている。米軍の無思慮なやり方は地元民の反発を招き、中央政府の影響力をも低下させている。人道援助に携わるNGOが軍活動と混同され攻撃の対象にもなりかねない。アフガニスタンで活動する七十七のNGOの連合体ACBARは、人道援助と軍事活動は明確に分けるべきだと文書で厳しく批判している。

国際社会は本質的なところで、治安を悪化させる原因に対して口をつぐんでいる。アフガニスタンが一つの国として安定するまでまだまだ時間がかかる。しかしこの地には、実力もあり献身的な働きぶりをするアフガン人はたくさんいる。村では村人相互の助け合いが地域の再生の力ギになっている。こうした希望の芽をアフガニスタンの人と私たち外国人が、息長く共に育んでいく。その先にしか平和で安定した社会は見えてこない。

（たにやまひろし）

*新援助調整システム=国際機関やNGOやアフガニスタン政府などによって、保健医療・教育・人権など多角的に復興を調整していくことが、昨年オスロの国際会議で合意されている

◎報告3 〈アフガニスタン〉

畑を耕すことは
平和をつくくること

●平和な人々の暮らしぶりに鏡あり

昨年アフガニスタンに延べ三カ月滞在した。気温五十五℃の真夏と〇(ゼロ)℃近い初冬に、医療チームとともに町や村を周り、復興に取り組む人々の暮らしぶりを垣間見て改めて感じたのは、普通の人々の暮らしぶりは平和で自立しているということだ。

しかし、町の入口の検問に、カーブル川の橋のたもとに、そして通り過ぎるトラックの背に、コマンドーと呼ばれる銃を抱えた兵士たちを見ない日はなかった。また、毎朝見上げる空には米軍ヘリが飛び交い、バザールで買物をする人々の視線の先には、怯えた表情の若い米兵を乗せたパトロール中のジープがいつもあった。

今、世界の各地が平和でない状態に陥っている。この状況下では確かに平和は構築しなければならぬものだ。しかし、自分が垣間見たアフガニスタンの人々の暮らしぶりは、平和が本来の



高橋清貴

前アフガニスタン現地調整員

姿であり、今はそれが壊されている状態とも言える。人々はコマンドーや軍閥、そして米軍のような外部の介入によって、自らの平和に対するコントロールを実質的に失ってしまっている。

生活の再建に精一杯生きている人々は、いわゆる平和運動を常に行っているほど暇ではない。しかし、田畑を耕し仕事に精を出すという日々の営みは、本来最も平和的で建設的な活動である。ならば、そうした普通の暮らしぶりを通じて、人々はどうのように自らの平和を維持し強化することができるのだろうか。

●人々が戦争を拒否する力をサポートしたい

アフガニスタンで人々と話をしていると、やはりみな「平和を心から望んでいたのだ」ということを実感する。二十年に及ぶ内戦と難民生活がようやく終わったことで、一昨年末のアメ

リカの空爆に感謝していた人も当初少なからずいたのだ。しかし今、勝手に入りこんだよそ者である米軍の傍若無人な軍事作戦はただ反発を呼び、軍閥も相変わらず人々の意志とは無関係に勝手な振る舞いを続けている。

ひとりひとりが平和を望み、日々の暮らしぶりが平和で自立しているならば、その思いと営みが平和につながるよう、アフガニスタンの普通の人々がコントロールを取り戻すことが平和という本来の姿に戻る道ではないだろうか。確かに日々の営みの中にも争いはあるだろう。しかし戦争や殺戮は、己の欲だけを追うシャヤーや軍閥、あるいはソ連やアメリカという外部の介入がなければ起きていないはずなのだ。普通の人々が平和の力、戦争に抵抗し拒否する力を実際に発揮できる環境を構築していくことこそが真の平和構築になる。力による軍閥の押さえ込みや外部者の都合による拙速な総選挙では決まてないだろう。

真夏の涼しげなカーブル川の流れや初冬の凜とした銀嶺の山々を眺めながらあれこれ考えていると、どうしても日本のことも考えざるを得ない。介入する側に回っている日本の私たちもまた、自らの平和に対するコントロールを失っているのだ、と。

(すがかずひと)

◎報告4 〈国内アドボカシー〉

浪費社会が戦争を生む？

●今の紛争 被害者は

軍人1対、民間人10

戦争の世紀と言われた二十世紀が終わって、世界は平和になるところかますます紛争の絶え



高橋清貴

調査研究・政策提言担当

ない時代に入った。多くの戦争は、途上国を戦場にして戦われる。一見、私たち日本人の暮らしぶりは紛争と関係ないように見える。しかし、今起こっている、あるいは起ころうとしている戦

争を他者の問題として片づけられないものを私は感じている。

「感じる」というのは、今の戦争で犠牲になるのは多くが民間人であるということだ。あるシンクタンクの調査によれば、第二次世界大戦における被害者の軍人と民間人の割合は九対一だった。それが、今は一対十に大逆転していると言う。その多くは女性と子どもで、過去十年間で、世界中の武力対立で死亡した子どもは二百万人、負傷した子どもは六百万人、精神的障

▼「ブッシュ戦争」のもとで、PKOのあり方が問われている
(東チモールで高橋写す)



●戦争の「原因」は石油とカネ

戦争の「原因」は、石油などの自然資源だ。米国のイラク攻撃も、米国の石油戦略の一貫に位置づけられているし、私たちが、アジアの安全

害を受けた子どもは一千万人、孤児になった子どもは百万人。その中には武力紛争で兵士として戦って命を失った約三十万人の十八歳未満の子どもたちも含まれている。
私たちが暮らす日本が、多くの武力紛争と構造的につながっているという事実をしつかりと理解したい。私は、それを「三つの現場」として考え、取り組んでいる。日本が戦争の「原因」に関わっていることを知らせ、戦争を「助長」することのない仕組みをつくり、そして「解決」に貢献できる可能性を考え、広める。その三つである。



▲アメリカの軍備予算は約3,500億ドル(約40兆円)。巨大な金喰い虫だ

『戦争中毒』より

保障に力を入れるのは、石油の海上ルートの安全を確保するためだと言われれば、納得してしまう人も多いだろう。米国が浪費社会であることと、あの国が戦争を好むことには、必然的なつながりがある。利便性を追いかける私たちの暮らしのあり方そのものが世界中の紛争の原因の一端を担っていることを、もっと市民が明確に意識するようになれば、紛争が起こる可能性を小さくしていけるのだ。

戦うには金が必要。一発七千万円のトマホークを撃ち続けるために使った金は、改めて別の手段で生み出されなければならない。そこに略奪と搾取のためのマーケット(市場)確保と軍需産業育成という目的が生まれる。「開発」とか「投資」とか言われるものも、新たな衝突を生み出し続ける。大国が仕掛けた戦争は、この経済のあり方を再生産させている。経済開発は戦争にとって手段であり、同時に目的なのだ。この紛争経済について市民の側から調査し、情報発信をしていくことは、最初にやらなければいけないことだ。

戦争が金を生むこともある。軍需産業は、いま不況の米国経済にあつて成長株のひとつであ

る。この米国と同盟を組み、彼らのやることを支援し続けているのが日本である。ビジネス化した戦争に大義はない。日本は安保同盟、たいうことで意思決定を行ない、金を出すことでエールを送りつづけて、紛争を助長している。おこぼれをもらうために米国やイスラエルによるアフガニスタン、イラク、パレスチナへの紛争に歯止めをかけないとしたら、私たちが紛争の加担者だ。

●ODAにも平和配慮を 政府開発援助

日本には二十世紀の記念碑とも言うべき「平和憲法」がある。この高い理想に一步でも近づかために、非暴力という手段での国際平和への協力を行なうべきではなからうか。そのために、ODAを活用するのは良い。元々、人道的のために行なわれるのがODAである。しかし、このODAが不透明な政治決定と結びつき、配慮の無いままにすまれば紛争を助長する道具と化す。歯止めをかける原則やガイドラインを整える必要がある。ODAに「平和配慮」をしつかりと行なわせることが、私たちにできる平和構築の第一歩ではないか。

世界中の紛争地において、市民・NGOは非暴力による紛争予防、平和構築の実践を積み重ねてきた。今こそ、軍事と一体化するのではなく、NGOが非暴力の紛争予防と平和づくりに貢献できることを示し、そこに政府を巻き込み協力させながら、市民・NGOの側から「平和構築」の意味や意義をつくっていかなければならない。

暮らしの場で紛争の「原因」をなくし、紛争を「助長」しないよう政府に働きかけ、「解決」するための具体的な非暴力の取り組みを市民・NGOが実践し続ける。こうした地道な努力こそが日本という現場からできる市民・NGOの「平和構築」活動である。(たかはしきよたか)

第Ⅱ部 「平和」3人トーク

「いま何ができるか」

第一部で平和について現地活動から報告した三人が、最近の紛争について、なぜ紛争は終わらない？ 平和のために私たちに何ができるか…をトークした。

1. 現場発、平和のつくり方

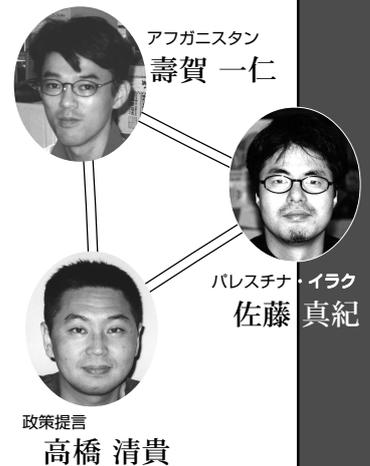
●農民、兵士、軍閥、米軍が混在

壽賀 僕は十数年前のエチオピアの内戦、湾岸戦争、ルワンダ虐殺などの戦後に関わってきたのですが、今回アフガニスタンにいて、ずいぶん違うなと思いました。アフガニスタンでは平穏で安定した暮らしを望む普通の人たちと、その近くに立っている兵士たち、その上にいる軍閥というか私兵を抱えた親分たち、その脇でおびえた顔をしてパトロールのジープに乗っている二十歳くらいの米兵、これらが互いに別世界のように存在していると感じたのです。

人々は、村に戻って家を直し、用水を掃除し、不発弾を取り除きながら畑を耕し、という確かな時の流れを歩みだしている。しかし彼らは、



●すが・かずひと
アフリカを中心に活動十余年。
鋭い指摘は長年の活動経験のたまもの？



アフガニスタン
壽賀 一仁

パレスチナ・イラク
佐藤 真紀

政策提言
高橋 清貴

アメリカの空爆で戻れたわけで、自分たちの平穏なくらし、平和な日々を自らコントロールする力をまったく持っていない。自分たちとは無関係に、軍閥や政府がコントロールがきかない存在としてそこにあるのです。

アフガニスタンの普通の人々が、くらしの場で平和を守り、あるいはつくり、それを自分たちでコントロールできるようにするにはどうすればいいのか。現場で数カ月を過ごし、僕が抱いた一番の問題意識です。「人々による平和づくり」を一緒につくっていきたくないと痛切に思いました。

●ストップ戦争！平和教育から

佐藤 個人的なことから話しますと、一九九一年の湾岸戦争をテレビで見て始めて戦争というものを意識したという気がします。国民のほとんどが戦争に反対していたにもかかわらず、なんで日本はあんなにお金を出してしまっただのらうと思った。日本政府は金額の割にはあまり感謝されなかったことにトラウマを持ったのですが、僕たちは戦争に協力したことでトラウマを持った。テレビで見ているときみたいな戦争なのですが、確実に無実の市民も殺されている。「僕も何かしなければいけない」と思い

ました。そして、九四年にイエメンに行つて、本当に戦争に遭遇します。内戦が始まり、スカッドミサイルが飛んできて、毎日銃声と対空砲が聞こえる。改めて戦争と平和を考えるきっかけとなりました。

それから九七年にパレスチナに入りました。平和な時期で、子どもたちと話しながら、この子たちがどうやって平和をつくるのだろうかと考え、そこから「平和図書館」を創った。そして二〇〇〇年から再びイスラエルとの紛争が起るわけです。

この紛争を外から見ると、対等な者どうしが銃を持って戦っているように見えるのですが、実際はまったく違うんですね。イスラエルは戦車を使い、たかが十キロしか離れていないところを攻撃するのに戦闘機を使う。そこに一人テロリストがいるからと、ビルごと吹き飛ばしてしまふ。周りにいる市民や子どもたちが死んでしまふのは当然なのです。それがわかっていてやる。戦争を止めるには、双方の市民の力も必要なのですが、強い力を持つている者が本気になつてやめようと思わない限りできない。その強い力は、民主主義を標榜するイスラエルであれアメリカであれ日本であれ、市民がつくっている。ですから、平和教育をきちんとやって、そこから戦争を止めていくことが大事だと、五年間パレスチナにいて改めて思いました。

パレスチナではずっと子どもたちを追いかけました。子どもたちはごく素直で、ガンジーや広島の子の話をすると、みんなよく理解してくれて感動します。逆に日本の子どもに学校などで話すと、ガンジーも広島も知らなかったりする。日本は強い力をもっているのですから、平和教育にもっと力を入れていかなければいけないなど、パレスチナの現場と日本を往復しながら考えました。



←浪費社会→際限なき資源の需要…戦争！
『戦争中毒』より

●普通の市民として平和にかかわる

高橋 二人と違って僕はいわゆる紛争地をあまり知りません。多くの日本人がそうです。そういう平均的日本人として、平和の問題にどう関わられるか、それが僕の出発点です。

僕は鶴見俊輔さん（哲学者）の本が好きなのですが、彼がベ平連（一九六〇年代末から七〇年代にかけてアメリカのベトナム戦争に反対して、鶴見氏や小田実氏らの呼びかけで広がった市民運動。著書に「ベトナムに平和を！市民連合」）で平和運動をやったときに、アメリカの脱走兵をかくまうんですね。彼はそのとき、常に自分はどこまでがんばられるかを考えていた。米軍の憲兵が米兵をかくまっています。自分のアパートにやってきて、銃を突きつけられたとき、自分はどうするかを仮定して自問自答していたというんですね。彼はそのとき「個人として何が捨てられるか」を考えた。命かもしれないし、社会的地位かもしれない。強さは「捨てる」ことから出てくるということですが、僕も何を捨てられるだろうかと問いかけようとしています。しなやかに、したたかに平和運動をするというのは何かを捨てるといことなのですが、けっこう難しい。普通の人たちが自分の問題だとして、長く関われる活動は、一つでも二つでも自分から「捨てられるもの」を見つけておくことではないかと思っています。そして、個として平和に向き合う意志を確立していく。



●さとう・まき
1994年の青年海外協力隊以来、中東で活動。いつも「子どもたちの心の平和」を考える。豊富なアイデアがウリ。

2・人の命が軽くなった

●「テロ戦争」でどこでも戦場

佐藤 パレスチナ、イスラエルは今のような状況になる前は和平路線を取り、交渉を続けていた。それがうまくいけなくなって、武力によって解決しようということになり、シャロン首相が出てきた。彼は戦争犯罪を問われるべき人間です。イスラエル内部でもレバノン侵攻の責任を問われて辞任に追いやられた、そういう人が復活してきてしまった。

イスラエルというのは民主的な国なのですが、民主的なシステムがこういう人物を選んでしまった。つまり戦争を選んだのです。これはテロとの戦争ではない。暴力による問題解決です。パレスチナの子どもたちが命を奪われたことへの復讐が、イスラエルの一般市民に向けられた段階で初めて「テロとの戦い」という流行の言葉が使われます。ちょうど九・一一事件も重なって、アメリカも「テロとの戦争」を掲げた。この言葉は物事の本質をはぐらかすのには非常に都合のいい言葉です。本質的な問題の解決に取り組まずに世界が戦争に向かっちゃった。

パレスチナの人たちは、孤立しています。彼らはアメリカ文化を映画などでよく知っていますし、アメリカに行っているパレスチナ人も多いので、アメリカへの敵対心はない。だけど、これだけひどいことが行なわれ多くの子どもたちが犠牲になっっている。ブッシュ大統領の「テロリストだから」というだけの説明に国際社会は追随している。パレスチナの人々の間では、自分たちの言うことは誰も聞いてくれない、希望も未来もない、ということ、自爆テロがずいぶん増えました。しかもそれが子どもや女性に

まで広がっている。集団自殺願望のようなどころまで追い詰められてきています。

壽賀 かつては内戦の現場に行くと、どちら側に行っても、その内部は安全だった。危険なのは最前線だけでした。九・一一の「同時多発テロ」があつて、アメリカによるアフガニスタン侵攻、民間人の犠牲の増大、そしてブッシュ政権による先制攻撃容認論と、人命や戦争のあり方に対する考え方やルールがどんどん崩れてきています。今やどこも戦場だ、ということを経験している。今やどこも戦場だ、ということを経験している。今やどこも戦場だ、ということを経験している。今やどこも戦場だ、ということを経験している。

もう一つ感じるのは、高橋さんが「報告4（5P）」で言っている資源をめぐる戦争という視点です。コンゴやアンゴラでは財をめぐる現地のならず者や外部の有力者の争いという感じだったので、アファガニスタンやイラクになると、どうも違います。東西冷戦が終わって九〇年代に入ると、相互依存の時代といわれ、争いは起きないといわれた時期がありました。資源を依存している側は、依存しているがゆえに抜き差しならなくなっていました。その代表がアメリカですね。ここもこのように感じて資源の押さえに入った。以前のように紛争から距離を置いて、間接的にでも利益が取ればよいという態度ではなくなりましたね。

●際限なき利潤追求↓際限なき戦争

佐藤 なぜそうなるか。僕が感じるのは、よく国益ということが言われるのですが、私益がさらに強くなっているということです。企業活動がグローバル化していて、そうした企業がネットワークを組んで議員に働きかけ、自分たちの権益を守るために戦争を仕掛ける。しかしそれだけでは国をあげて戦争しようという流れにはくっつかない。だからアメリカにしても、アフ

ガニスタン空爆までは九・一一があつて何とかナシヨナリズムで形がつくれたのですが、イラクになると私益が目立って、正義はどこにあるんだという議論が国内でさえ出てきている。

高橋 九・一一の後、ブッシュ大統領はテロとの戦いに「無限の正義」を求めると表現しましたね。昔の戦争は終わりが見えたのですが、「無限の正義」を求める戦争には際限がない。資源の問題も同じで、かつては自国の需要をまかなうためにはここまでいいという線があつたのですが、消費が消費を生む現代資本主義のもとで企業の利潤追求もとめどがなくなつた。経済でも、敵のつくり方でも、対象を限定せず際限なく進むしかない。どこに終わりがあつたろうと考えるのですが、終わりは自分の中にしかないのですね。

テロリスト＝原理主義者という見方がありますが、ウソですね。オサマ・ビンラディンという人は資本主義を利用して力をつけていった。むしろ資本主義の落とし子と言つていい。神を持ち出すブッシュ発言を聞いていても、自分の生命を賭すだけの崇高な大義をもつことは素晴らしいと言つているように聞こえる。つまりアメリカは自分の影のような分身に対して戦争を仕掛けています。九・一一の後、アメリカは炭そ菌問題で大騒動しましたが、あれは敵が外ではなく内にいるということの象徴的な表れですね。そういう敵とアメリカは「戦う」と言っ



●たかはし・きよたか
ODA、平和構築の調査・提言に
忙しい。外務省・世界銀行との
ながりも深く、JVCの一角を
顔。

てしまったところに問題の本質が潜んでいると思えます。

3. いれでいいのか？ 日本

●「アメリカ帝国」をどう見る

高橋 先ほど「際限なき戦い」ということを言いましたが、この戦争は相手との関係の中で終わるものではなく、アメリカが「もう、やめた」というまで止まらない。そのアメリカは圧倒的な軍事力を持っていて、敵が自分の影であることに気づかず、憎悪の矛先を外に探し続けている。そこが恐いところだし、国際社会もそのことに不安感をもっている。最近よく言われる「アメリカ帝国」という言葉ですが、「帝国」は内側から崩壊していきます。異質な者を敵視するのではなく、共存する方法を探っていけないといつか崩壊するでしょうね。敵は自分の分身なのですから。

それを見失っているアメリカに日本はくつついているわけですね。ビジョンがなく、見通しが実に甘いと思います。ODA（政府開発援助）にしても、アメリカの戦争の方向に合わせようとしている。ODAは本来、共存のためのツールだった。それを米国への忠義を示す外交カードとして切ろうとしている。政府が今国会で成立させたいとしている「有事法制」もそうですね。今、PKO法の改正などが言われていますが、「停戦合意」や「中立的立場の遵守」などの五原則が実状に合わなくなつたからだという。アフガニスタンやイラク攻撃など、一方的に武力で叩くアメリカの「新しい戦争」を想定していることであることは明らかです。

政府が考える「国際平和協力」には、戦争を生み出す構造を変えて予防するために、日本はどうするかという独自の発想がない。アメリカ

と一緒に、敵を外に見つけて自衛隊を世界の戦場に出す。その結果、リスクが高まるから有事法制が必要だという論理です。僕たちが本当にすべきことは、自分の影とも言える敵を「排除する」のではなく、「共存する」ために何をすべきかを考えることではないでしょうか。

●欠ける歴史認識

書賀 現場から日本を改めて見ると、何をしたいのかまったくわかっていない国だな、という感じをもちます。高橋さんの話に即して言いますと、平和協力といいながら、平和とはどういうことか、議論がまったくなされないまま、事態に流されている。

アフガニスタンに対しても、過去まったく関心を持たず、現在もビジョンや関わり方が明らかでないままアメリカに従って介入している。村へ帰って平穏な暮らしを営み始めた人々とは無関係に、あるいはその平穏さを壊す存在の一員としてそこにいる。今のままでは、日本政府のやり方で平和協力が「積極的に取り組む」とは、その国の人との関係で平和を壊す方向にしかならないと思うのですが、その意識がまったくくない。「実にさびしいなあ」というのが現場から日本を見た率直な思いです。

高橋 見通しが甘いというのは、裏を返すと歴史認識の問題だと僕は思います。将来を長い射程で考えるには、歴史をさかのぼって考えなければならぬのですが、それがありません。戦争や紛争があり、平和協力をといるとき、どうしてその紛争が起こつたのかということ、歴史の中の平和憲法の位置付け、そのなかで日本は何ができるのかという問いかけ。こうした歴史を見る目が欠けている。私たちNGOも、目先のことにとらわれない視野を持つ必要があります。



◀「アメリカのミサイルや爆撃機はどの大陸のどの標的も攻撃できる」
『戦争中毒』より

4・望む平和を、どう実現するか ●「戦争」を伝えよう

壽賀 本来人は平和な存在であり、平和を望んでいる。僕はそこを大事にしたいと思っただけです。平和が今、国家によって崩されているのですが、それに引かざる引かざるを具体的に拒否する、あるいは拒否することを具体的にどうやるか、が今問われているのだと思う。個として平和を求め、銃や力に屈することなく、戦争を拒否できるような仕組みをどうつくるかということです。介入する側の国の市民も、介入される側の人々も、自分たちが平和をコントロールできる仕組みを自分たちなりにつくっていく。あるいはお互いに支援し合う。それが「平和構築」ということだと思います。

佐藤さんが言った平和教育もその一つでしょうし、具体的な制度づくりもある。国内で言えば、例えば戦争に対する国民の拒否権を制度としてつくる。国際的には、小型武器（ライフルや手榴弾など）規制は核問題と同じくらい大事な問題だと思われ、国際刑事裁判もそうですね。アメリカはテロという「犯罪」を戦争にすりかえたのですが、そうはさせない仕組みをつくる。NGOや市民団体はそうした努力を続けながら、個人として拒否あるいは不服従する行動を支えていく。最初に、アフガニスタンで普通の人々が平和をコントロールできる力を、と言ったのはそういう意味です。

高橋 僕も人は基本的に平和を好むものだと思います。赤十字が国際人道法のキャンペーンをやっていますが、その一環で戦争体験国にアンケートをした。家族を殺した敵兵であっても降参してきたら保護しなければいけないというのが国際人道法にあるのですが、それについて

「あなたはごうしますか」と聞いたところ、「保護する」と答えたトップはカンボジアで、次はソマリアです。一番低かったのはロシアで、アメリカがその次。戦争体験者ほど敵味方関係なく命の大切さを知っている。こういうところに人間の強さを見るし、人は本来平和だということとを信じます。

この戦争体験国の人々の思いを、日本の中でどう伝えていくか。戦争体験のない僕と同じような多くの日本人に、どうすればひとりひとりが平和の重さを知ることができるか、平和のためには何を捨てるかができるのかを考える場をつくりたい。その仕掛けと提案を考えるのがNGOの役割ですね。

佐藤 日本の子どもたちにパレスチナの話をするのですが、「かわいそうな人たち」というレベルでしかとらえてくれない場合が多いですね。人間としてのつながりを実感できないでいる。この間、イスラエルの国家安全保障委員会の議長が日本の国会議員の前で「相手を蚊と思わなければだめだ」と言っていました。蚊はピシャッとたたいて殺さなければならぬし、わいてこないようにボウフラが繁殖する池をつぶさなければならぬ、と。しかしそこにいるのは蚊ではなくて生身の人間なんだ、ということ自分たちの身に置き換えて考えてほしい。

●NGOの「平和構築」三つの理念

高橋 この特集のテーマは「平和構築」ですが、政府機関もメディアも安易にこの言葉を使っている、そうしているうちに「平和構築」が政府の思惑に沿った意味合いを次第に帯びてきている。NGOから「平和構築とはこういう意味だよ」ということを明確に言っていく必要があると思っるところです。

平和構築に込めたい理念はいくつかあります

す。一つは「非暴力」です。政府が言うような武力と一体化するような使われ方は困る。二つ目は「構造的な問題に取り組み」ということ。石油を含む資源の問題とかお金、貧困の問題、さらには戦争を仕掛けようとしているアメリカとの思惑、といった問題です。三つ目が「予防」です。起こってからではなく、紛争にいたる前に、その経過にしっかりと取り組む。

その活動のイメージは、まず国際的にNGOや市民団体とのネットワークをつくり、デモなどで意思表示するヨコの運動があります。ここでは市民性が問われます。次に、政治家への働きかけ（ロビーイング）といったタテの運動。これは専門性が問われる。もう一つ、ナナメの運動。僕なりに解釈すると、これは市民性と専門性を兼ね備えた運動で、例えば平和の問題なら、環境とかお金、資源の問題など、別のテーマとなぎ合わせて平和づくりに貢献するという切り口です。そういう活動こそ平和構築と定義づけたい。こうすることで机上の平和論ではなく、紛争の構造を暴き、世界をつくり直す具体性をもつことができるのではないかと。

壽賀 「平和構築」では、平和教育とか戦争を伝えることは大事なことです。が、今現実に進んでいる事態に対して、それだけではうまく機能しないだろうと思う。結果として事態の進行を止められない。個人の抵抗や不服従をどう実現するか、個の「ノー」が国の意志決定に具体的効果をもつ仕組みをどうつくっていくかが課題だと考えています。

佐藤 今の日本は、いろんな人の犠牲の上に成り立っています。例えば石油を確保するために、アメリカの戦争を容認するとか。僕らはそのことを絶えず考えている必要がある。そういう構造の中で僕らができることは非常に限られている。高橋さんが言うように、アドボカシー

今すぐできる！行動リスト

《インターネット》

●知る●

○田中宇の国際ニュース解説

フリーの国際情勢解説者、田中宇（たなか・さかい）が、大手メディアとは違う独自の視点で世界の時事問題を分析。URL <http://tanakanews.com/>

●行動する●

○ハガキでイラクの人々に伝える。

イラク攻撃に反対の市民はたくさんいるということを伝えよう（例文あり）。URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/iraq_hagaki.htm

○武力行使に反対する国連と安保理各国を励ます。

URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/iraq_rijikoku.htm
URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/iraq_fax.htm

○アメリカ政府、イギリス政府にメッセージを送る。

アメリカ政府に（例文あり）
URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/iraq_denwa.htm
ブレア首相に「イラク攻撃を止めて」という署名（和訳あり）
URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/medact_pet.htm

○日本政府に対して『人道的停戦を呼びかけよう実行委員会』

URL http://www.geocities.com/ceasefire_anet/action.htm

○戦争に反対する非暴力運動の世界的な同時行動への参加。

2月15日や3月もピースパレードなどが予定されている。
URL <http://www.WorldPeace.Now.jp>

●番外編●

○こどもたちのために『キッズ・ピース』

URL <http://kids.eeeweb.com/>

《石油にたよらない生活のために》

○W（ワット）数の少ない電球を使用する。

全家庭の100Wの電球を60Wにすると年間133億KW/h（原発二基分）の節約。

○冷蔵庫にはものを詰め込みすぎないようにする。

冷蔵庫の容積の三分の一程度にすると一世代当たり約6KW/hの節約。

○自動販売機はなるべく使わない。

全国の自動販売機は年間75億KW/hで、原発一基分より多く消費する。

○太陽熱温水器などを設置する。

給湯では一般家庭の60%をまかなえて、灯油240L（リットル）分に相当。

○生活サイクルを朝型にして夜間の照明・暖房を減らす。

照明時間を1時間縮めれば石油120万KLの節約。

※『地球を救う133の方法』より アースデイ日本 編/家の光協会 発行

（政策提言）で市民が力に持つていくというやり方もありますが、一人の小さな人間としてやれることもある。きびしい状況におかれている現地の人と知り合って励ますことで、その時間、その人は平和になれる。平和な時間をちよつともつとつてあげる。こういうこともある面で大事かなという気がしています。こういう小さな平和づくりでも積み重なれば、大きな平和につながるのかな、という思いでいます。

●小さくても大きな声を出すNGO

高橋 どのような紛争地にも平和を求める声がある。当事者の中にさえあります。現場にいるからこそそれが見える。そこに手を差し伸べることは政府には難しい。そこにNGOの出番がある。声をかけたり、支えてあげたりという佐藤さんの活動がそれだと思う。NGOの具体的な実践事例を積極的に示していくためにも経験を共有するネットワークを拡げ、逆に、そこに政府も一参加者として巻き込んでいくことも可能だと思えます。

佐藤 NGOのあり方は重要ですね。ヨーロッパでもトルコでも、イラク攻撃反対の声は政府も含め強まっているのに、日本政府だけ法律まですべて変えて軍事攻撃を支援している。その一方で難民を待ちうけて、NGOも一緒に難民支援をやりますようにもくろんでいる。こうなるとNGOも戦争ビジネスに組み込まれてしまう。専門性の高い大きなNGOほど、たくさんの方を請け負いますからそういうところに巻き込まれてしまう。そしてNGOとしての声を出せなくなってしまう。

NGOって、小さくても人々と共感し、個人の思いを基礎に、人々と一緒に平和に向けてやっていくほうがいいのではないか。JVCは、組織としては小さくても、大きな声が出せるNGOとして歩んでいきたい。最近そんなことを考えています。（二〇〇三年一月十五日）

JVC「イラクに絵を届けよう」1,000枚キャンペーン★

イラクの子どもたちを勇気づけるために、1,000枚の自画像をイラクへ届けるキャンペーンです。

みなさんも周囲の子どもたちに呼びかけてイラストを集めて下さい！

<キャンペーン参加の方法>

官製ハガキ、またはハガキサイズの紙に、あなたの顔、または全身のイラストとメッセージ、氏名（ローマ字も）、年齢をご記入の上お送りください。

*送り先：〒110-8605 台東区東上野1-20-6 丸幸ビル6F 日本国際ボランティアセンター（JVC）
（担当：中山・寺西）

※締め切り：3月31日



▲イラクの子どももイラストを描いてくれました

（詳しくは本誌P.15）

スタッフのひとりごと

あなたの本当の気持ちを聞かせてほしい…

ラオス・カムアン事務所
中村 咲野

今、プロジェクトの成果を見直す準備を進めている。村人が必要としていることに対してJVCの活動はどこまで応えられたのか。そのことが一番知りたい。

どのようにしたらひとびとの本当の気持ちが聞けるだろう…。インタビュー調査では、あらかじめ、リップサービス(お世辞)を聞きに来たのではなく、あなたがどう思っているかを聞きたいと念を押した。ところが、モデル農園を実施している村では、すでにこちらで確認済みのバナナの苗の全滅については、誰も一言も触れなかった。

本当の気持ちを教えて…という切なる願いのもと、スタッフ一同何度も頭をひねった。ゲームをし

て雰囲気づくりをしては?一緒に作業をしたらいいのでは?小さなグループで話してみよう…。

妙案が出ない状況に半ば疲れはて「気持ちを確認め合うなんて夫婦でも無理なのに…」「人の気持ちは移り変わるんだから真意なんて…」「それほど知り合っているわけでもないのにたった数時間で”本当の気持ち”なんて理解できるわけない」…あきらめムードになっていく。

ラオス人の真意を探る…。まだ言葉もおぼつかない私はいつも考えあぐねる。彼らの本音や喜怒哀楽は、垣間見えるものつかみにくい。こちらが何を答えてもらいたがっているかにベクトルが向いているように思う。こちらの気持ちを最大限くもうとうする配慮だろうか。



イラスト/かじの倫子

開発プロジェクトでは住民参加を促すPRAという手法がある。多様な住民たちの意見をいかに反映させていくか。その中には言葉が通用しない者どうしの理解も含まれている。だとしたら私にとっても、言葉を介さない互いの理解を助ける手段としてPRAは有効かもしれない。悩むこの頃である。(なかむら さくや)



生ゴミはよみがえる

—土はいのちのみなもと—

菅野 芳秀=著 長谷川 健郎=写真
(講談社/1400円+税)

も開かれていく。(タイ事務所代表/松尾康範)

も読めるような文体で一冊にまとめたのがこの本だ。著者はこのプランの提唱者の一人で、著名な農民活動家である。現在私がタイの仲間と取り組む「地場の市場づくり」の活動もこの事業から多くのことを触発された。先日も活動地の村人と共にこの長井市を訪れ、この一月には、著者の菅野芳秀さんがタイにやってきた。レインボープランの基礎となる「土」の話を中心に、活動地の仲間たちと交流を重

みるよあきく

育んでいるのだ。奇人たちが集まって自己を主張する運動ではなく、ひとつの田舎町に住む人々全員が参加するこの運動は、どんな地域においても参考になる活動だ。まわりの子どもたちにこの本を読んでもらうことで、大人たちの未来

レインボープランを生んだまち山形県長井市。生ごみのたい肥化を実現させ、「偉大な田舎まち」著者語録」をつくった。生ごみが良質な資源に蘇り、町と村の豊かな関係が築かれる。「まちがむらにある土の健康を守り、むらがまちの人たちの健康を守る」。

レインボープランの準備期間は八年にも及び、たい肥センターが稼動してはや六年経つが、その蓄積を小中学校の子どもたちでも読めるような文体で一冊にまとめたのがこの本だ。著者はこのプランの提唱者の一人で、著名な農民活動家である。現在私がタイの仲間と取り組む「地場の市場づくり」の活動もこの事業から多くのことを触発された。先日も活動地の村人と共にこの長井市を訪れ、この一月には、著者の菅野芳秀さんがタイにやってきた。レインボープランの基礎となる「土」の話を中心に、活動地の仲間たちと交流を重

ねてくれた。「土」グラムの中には何十億もの微生物が生きていて、その微生物が土を豊かにしてくれているんだ。たい肥づくりはその生きものたちのエサをつくること。化学肥料ではできないことなんだ。微生物が良質な土をつくり、その土が良質な作物をつくり、その作物が良質な人をつくる。レインボープランはそうした土(人)づくりを地域のみんなが参加してやっているんだ」

この事業が心がけてきたことは「批判・反対から対案・建設へ」というメッセージだ。この本に記されている言葉に言い換えると、それは「否定をしない」ということ。相手の欠点をつつき合うのではなく、長所を分かち合うことで大きな力を発揮していく。この優しさが長井市に潜在する多様な力を発揮させ、「三十六色のクレパス」、十人十色の豊かさを

アフガニスタン

本間 一

アフガン流買物術

ア フガニスタンも冬を迎えた。首都カブールとパキスタンの商業都市ペシャワールを結ぶ、幹線道路の中間に位置する我々の活動地ジャララバードも、雪こそ降らないが朝晩ストーブなしではいられなくなってきた。

一月から旧紙幣の使用が禁止され、ドイツで印刷された新紙幣のみが街中に出回り始めた。

私が今一番気を取られているのは、駐留アメリカ部隊の動きでもカルザイ政権の今後でもなく、毎日のや毎時間の物価の変動である。我々の巡回医療プロジェクトでは、患者や栄養失調児を抱える家族に支給する医薬品や食用油、そして事務所の発電用燃料などを購入する度に、日々の値動きに振り回されるからだ。

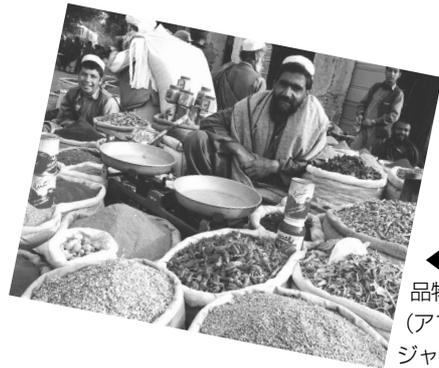
隣国パキスタンやイランから流れてくる品物や中国製品などは、店による違いはあっても毎日同じ値段だが、中東の産油国を経て入ってくる質の高い商品は、当日の対米国ドル交換レートが適用される

ため価格も変動する。したがって、今日複数の業者から見積書を手し、比較検討して購入予定業者を決めてから、明日購入しよう、などと悠長なことはやってられない。

最近の例では、プロジェクト車両の部品を交換したときのことだった。純正部品の見積を取りに早朝からバザールへ行った。三通り揃った段階で即決し、直ちに一番安い店へ押しかけた。最後の支払いの時になって電卓を持った店主いわく「あと八ドル分もらわないと」。

当地に赴任して一カ月が過ぎたが、幸いなことに、ここでは外国人だからと定価や生産国を偽って、高く売りつけようとする商店主には、まだ一度もお目にかからない。どうやら日々の出来事を教訓に、バザールの人々との交流を通してアフガン流買物術を地道に身につけていくしかなさそうだ。

(アフガニスタン事務所 コーディネーター)



◀バザールには品物がいっぱい (アフガニスタン・ジャララバード)

場から～

ラオス

名村 隆行

「華やかな報告」はもつたくさん

ライガン・ドックマイ

十 二月五日、六日、「コミュニティの天然資源管理」

と題したワークショップが開催され、JVCも発表を行った。ラオス国立大学や海外からの研究者、農林省職員、世界銀行、アジア開発銀行、そしてNGOと様々な顔ぶれが参加して、ラオスの天然資源の管理について考えるユニークな会議だ。

政府関係の会議では、社会主義国家の特徴なのか「成果を誇張し、あたりさわりのない問題を指摘して、拍手で終わる」というのがお約束となっている。これをラオス語で「ライガン・ドックマイ(華やかな報告)」と呼ぶ。

JVCは、中部のカムアン県で、十年にわたって「村人による村の森づくり」を支援している。相応の成果もあるが、まだ解決できない問題が残されている。そのひとつが、企業や政府のデイベロップ(開発業者)が、村の十分な同意もなく、森を開墾して操業してしまふことだ。石灰岩の採掘、大規模な商業植林：このようなデイベロップに、簡単に操業を許可してしまう政府の動きを牽制する意味でも、マクロな動きを決定する立場の人たちが集うこのような場で、現場で起こっている問題を公表するのは意義があると判断した。

政府関係の会議では、社会主義国家の特徴なのか「成果を誇張し、あたりさわりのない問題を指摘して、拍手で終わる」というのがお約束となっている。これをラオス語で「ライガン・ドックマイ(華やかな報告)」と呼ぶ。

JVCは、このタブーをあえて破った。波紋はあった。質疑応答になると、林野局の役人が糾弾を始める。「問題となっている村はどこだ。関係者、責任者は誰だ?」また「なぜ、このような問題がおこるのか、その原因は?」。夜のパーティでも、研究者と政府関係者が「ライガン・ドックマイは、もうやめたほうがいい」と議論をしていた。

自由な発言が制限されるラオスで、このような発表をするのは勇気がいる。だが、村の問題を解決していくためには、村に入り込むだけでなく、こういった機会も利用して、マクロな動きに働きかけることが、この国で活動するNGOの重要な役割だと信じている。

(カムアン事務所 森林保全担当)

イラク 非戦反戦の輪を

支援開始に向け、現地の病院・施設を視察

熊岡 路矢

一 月上旬、吉野 都看護師と戦争前夜のイラクを訪問した。赤新月社(赤十字にあたる団体)やフランスのNGO「世界の子ども」を通して、子ども病院、孤児院、聴覚障害児童の施設で、設備改善や職業訓練などの支援を行なうためである。国立小児病院では、白血病の子どもたちと会った。必要な薬が入手できず、また輸血からC型肝炎を発症するなど、苦しい状態で子どもたちが闘病していた。

経済制裁は、一般の人々を直撃している。子どもたちは靴磨き、菓子売りなどで働いている。小さい稼ぎも貴重な生活財源である。小学生の非通学率は、四人に一人まで上がり、成人女性の識字率は低落してきている。

厳しいイラク情勢であるが、その中にも希望を見た。①良心的な知識層があり、平和な状態がもれば、外部支援の要らない社会を取り戻せる力をもっている。②関係が悪かった周辺国(イランなど)がイラクと話し合い、地域での協議を続

けている。③非戦への運動は、一月十八日に世界各地で同時に、デモ・集会が行なわれたように、世界的に広がっている。

バグダッドには、平和団体の人々が集まってきた。その一人、オキーフ氏は十九歳で米海兵隊員として湾岸戦争に従軍したが、殺傷への罪の意識、「湾岸戦争症候群(劣化ウラン弾の被害)への自国政府の不誠実な対応に失望し、英雄勲章を返上し、自発的な「人間の盾」としてイラクの人々と生死を共にすることを選んでいる。

日本では「戦争後の平和構築および再建」論議が盛んであるが、戦争への動きを見越して「そうだった後には、けが人を治し、壊した道路を直します」というのでは、あまりに志が低い。

経済制裁ではなく人道支援を、軍事攻撃ではなく非戦反戦を。この共感の広がり、加わっていききたい。

(JVC代表理事)

※二月四日付の朝日新聞「私の視点」に、熊岡の同趣旨の論者が掲載されました。



コンポスト・トイレ▶
をつくっているところ
(南アフリカ)

プロジェクトの ～現場

東

ケープ州カラ地区での農業プロジェクトでは、自然循環を生かし、地域にあるもので畑の土をよくしている。こうとしている。

例えば牛は牧草を食べ、人々はそのミルクや肉の恩恵に預かるが、糞は土に還り貴重なたい肥になる。では、人糞は? カラ地区の家々では二メートルくらいの穴を掘ってトイレをつくるのが普通だが、匂うので家の敷地の隅につくられ、流れ出す汚水が飲み水にも使っている川を汚染している。近隣の町では、汚水によるコレラも発生した。

人糞も「臭くて汚いだけか?」家畜の糞を畑に還すように「有効な資源」にできるはずだ、ということ話し合い、「コンポスト・トイレ」の案が出された。つくり方や材料についていろいろな情報を集め、昨年初めに試作品第一号がサキウエ家の庭につくられた。サキウエ家は、自然農法を実践し、他の村人を啓蒙している。こうとするパイオニア農家のひとつである。

南アフリカ

コンポスト・トイレで
人糞をたい肥に!

津山 直子

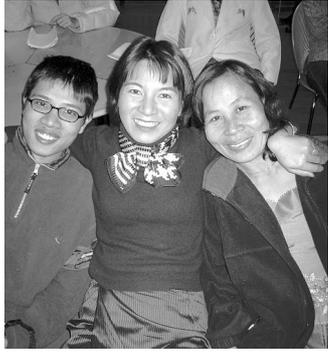
レンガ造りのコンポスト・トイレ。入って三段の階段を上り、一メートルの高さに張った板に穴をあけてつくった便座に座る。二つの便座が並んでいて、六カ月ずつ使い、その後の六カ月は分解させるために休ませる。用を足した後に木屑や草を落し、発酵を促進させる。六カ月でサラサラのたい肥になり、トイレの裏側の木枠をはずすと取り出せるようになっていく。通気のためのパイプ筒もつける。

匂いはなく、ハエもたからないので、家のすぐ横にくくっても大丈夫。小さな子どもたちも、「前のトイレは行くのが恐かったけど、これは大好き」と喜んで使っている。

昨年末には六カ村の九家族が完成させ、JVCはこれらの農家につくり方を伝授し、資材の一部を提供してきた。今年にはトイレづくりを完了した農民が、次につくる農民に伝授し、建設を手伝っていくことで、技術が村々に定着するよう計画している。

(南アフリカ事務所代表)

▼左はベトナム人、右はラオス人の友人（デンマークのインターナショナルの学校にて）



この一月二日に、一年五ヵ月間滞在したデンマークより日本へ帰ってきた。ただただおいしいご飯が食べたい、という切羽詰まった(?)理由であった。そうはいっても約一年半ぶりの日本に実はわくわくしていた。海外で生活した分、日本を客観的に見る目を少しは培っただろうし、日本に住んでいてはわからない日本の良さというものもなんとなく感じられるような気がしていたからである。

しかし、関西空港に降り立ったとたん、次から次へと流れてくる案内の車内放送にびっくり&うんざり。不慣れた旅行者にとって、案内の車内放送はともにも便利だし安心させることはまじがない。気がばり心くばり

会員登場

リレーエッセイ(21)

デンマークから帰ってきて

(鹿児島県) 山下 春美

であることも理解できる。でもこれが、うるさいのだ。日本に降り立ったこと感慨深さを味わう時間も与えられないほどにエンエンと続く。

お店に入っても威勢よく「いらっしやいませ〜っ!!」という掛け声。そして、マニュアル化された言葉で「お一人様ですか? おタバコはお吸いになりますか?」と、尻上がりの語尾で尋ねてくる。ヘルシンキで食べたマクドナルドのハンバーガーを思い出した。どこで食べたって同じ味。なんとなく、悲しいね。

久しぶりに見る鹿児島の街もそんなに変ってはいなかった。しかし、以前はそんなに気にならなかった商業広告や店先の看板の多さが、街の景観と不釣り合いなことが気になった。しかし、それ以上に驚かされたのは、「注目度ナンバーワン広告車体バス」と車体に書かれた真っ黄色いバスがやって来たときだった。資本主義もここまで来たのか。

せっかく、日本の「いいところ探し」を始めた矢先だったのに、私の目に入ったふるさとは、経済至上主義が相変わらず進行している街だった。日本のいいところ、日本人のいいところ。それを、見つけ、表舞台に出していくこと。これまで、思うだけで何もできなかった自分。でも、私はデンマークで行動していく勇気を身につけたんだ、そう自分に言い聞かせる。もう、逃げられない。私の舞台は、ここ日本なのだ。

国内E.T.W.O.はK

WORLD PEACE NOW 1.18
 ~もう戦争はつらなご~
私たちはイラク攻撃に反対します

米国民団体「ANSWER」が呼びかけた、米国のイラク攻撃に反対する集会やデモが一月十八日世界各地で始まった。日本では、三十三の市民団体の呼びかけに東京の他札幌、名古屋、大阪、沖縄などでも集会があり全国で一万数千人が平和への願いを訴えた。

- ◆ この集会の主旨は、大きく次の三点。
- ◆ もう戦争はいらない。
- ◆ イラク攻撃に反対。
- ◆ 非暴力行動として行なう。

東京の集会は日比谷公園で行なわれ、百七十五ものNGOや市民団体が賛同し約七千人が参加した。

まず、十二時から小音楽堂にて行なわれたピースコンサートでは、十組のアーティストによる音楽のメッセージ。約二時間のコンサート終了後、ピースパレードが大音楽堂から出発。



▲日比谷公園でイラクの状況を伝える代表の熊岡 路矢



▲約7,000人の市民が銀座をねり歩いた

市民団体の方々だけではなく、個人の参加も大変多かったのが印象的だった。「戦争は絶対イヤだ!」「これ以上弱い市民の犠牲を増やすな!」など、ひとりひとりが強い願いを持ったパレードは約二時間、新橋〜銀座を通り、再び大音楽堂へ。

最後は、大音楽堂でのピースラリー。いろいろな分野で活躍する方々が、イラク攻撃反対の強いメッセージを壇上より伝えた。日本国際ボランティアセンターからは、代表の熊岡路矢さん、パレスチナ担当の佐藤真紀さんが「戦争が終わってから、各国のNGOが再建に行けばいいというのではない。戦争そのものを阻止するべきだ」と訴えた。どの方のメッセージも集まった人々の大きな賛同を得て、平和への願いは一つになった。私たち市民が声を起こさなければ始まらないと痛感できた一日だった。

(ベトナム・ボランティアチーム / 木本 房江)

自画像、イラスト、募集中!!
イラクへ届けよう!
1000人イラストキャンペーン

今私たちは、イラクの人々のために何ができるのでしょうか。戦争の恐怖にさらされている彼らを勇気づけるために、JVCは現地の子どもたちの精神的なサポートとして、絵の交流を始めました。子どもたちが描いた自画像千枚をイラクへ届けましょう。現地での展示会も開かれる予定です。どうぞみなさんの周りの子どもたちに呼びかけ、自画像を描いてもらってください。

▼将来は建築家に
なりたい(イラクの男
の子・9歳)



小学校で★平和ワークショップ

春まだ浅い二月六日(木)、東京都西多摩郡の奥多摩町立氷川小学校で平和のワークショップを行いました。

「イラクへ届けよう千人イラストキャンペーン」の新聞記事に目をとめてくださった氷川小の先生のお招きで、四年生から六年生まで約六十名の児童に、JVCのイラクでの活動を紹介しました。



現地では、バグダッド市内のモスクや女性の黒い衣装に興味津々の様子でした。劣化ウラン弾が原因とみられる病気が増加していることや、

★～カンパも大募集!～★
この活動には通信費などの経費がかかります。カンパへのご協力をどうぞお願いいたします。
郵便振替口座番号:
00190-9-27495
加入者名: JVC東京事務所
※通信欄に『イラクキャンペーン』とお書きください。

※主に小学生から高校生までを対象としています。
《締切》三月三十一日(月)

- ①官製ハガキまたはハガキ大の画用紙を用意。
- ②自画像(顔または全身)を描く。
・画材は絵の具、サインペン、色鉛筆など自由。
- ・自画像と同じ面にメッセージ(日本語可)、氏名(ローマ字)、年齢を記入。
- ③JVCへ送付
・裏面に住所氏名を日本語で記入。

経済制裁により生活がひっ迫し、就学率が下がっていることなども、小学生なりに理解してくれたようにした。

日々の糧を得るために働かざるを得ない子どもたち、そして医薬品や医療器具が不足し十分な治療が受けられない子どもたち。日本とはずいぶん様子が違うことに、氷川小のみならず少なからずショックを受けていました。最後に、千人イラストキャンペーンの協力を呼びかけました。

子どもたちのまっすぐな感性と意欲。大人の思惑など構いなしに、ボーダーを越えてつながってゆくものを感じました。
(会員・開発教育担当/中山いくこ)

新スタッフ紹介



●石原 聡美(いしはらさとみ)
パレスチナ事務所 勤務

JVCとの最初の出会いは一昨年の夏、エルサレム旧市街のJVC「子ども平和図書館」を訪ねたときです。昨年四月には、ヘブロンから来日したパレスチナ人の友人の講演「アドリ・ダナさんを囲む会」を一緒に計画しました。昨年四月から、変り者が多いことで知られるヘブロンで活動していて、仕事で出会う人、ほぼ全員に何故か「ヘブロン人なの?」と聞かれます(ヘブロンにいる人は皆、変人と思われています)。その度、否定するのですが、どうも信じてもらえません(泣)。エルサレム、ベツレヘム、ヘブロン、ラマラ、ガザ...、各地の情報をできるだけ日本に届けたいと思っています。

募金をありがとうございます

JVCの活動は皆さまの募金で支えられています。

① JVC 募金
JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。
口座番号: 00190-9-27495
加入者名: JVC 東京事務所

1月計 2,072,643 円

	1月
タイ	0円
カンボジア	5,000円
ラオス	501,000円
ベトナム	16,000円
エチオピア	0円
南アフリカ	60,000円
パレスチナ	71,511円
アフガニスタン	1,240,586円
北朝鮮	5,000円
無指定	124,710円
緊急 イラク	53,836円

②犬養道子「みどり一本」募金
この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。
口座番号: 00100-8-212497
加入者名: 犬養道子「みどり一本」
1月計 348,230 円 45名

2002年 クリスマス募金
14,213,459 円 2,258名

～あなたもサポーターに～
『JVC サポート募金』

JVCでは、「JVCサポート募金」を99年からはじめています。これは、銀行口座からご希望の金額(1,000円単位)を毎月自動引き落としで募金できるシステムです。これなら「海外活動には協力したいけれど、なかなか郵便局まで行けない」「つい、めんどうで」とお感じの方も、その手間が省け、定期的に募金していただけます。

一方、JVCにとっては、この募金により、海外での活動が長期的に継続しやすくなるという利点があります。

もう一つ、口座引き落としの他、JVCカード(ジャックス、VISA/JCB/Master Card)にご入会いただくと、カード利用額の0.5%がJVCに寄付されます。

口座引き落としでらくらく募金、JVCカードのご利用でご負担なく寄付。

春の新年度を機に、『JVC サポート募金』のサポーターになっていただければ幸いです。

お問い合わせ・お申し込み:
03-3834-2388 岩間 邦夫まで

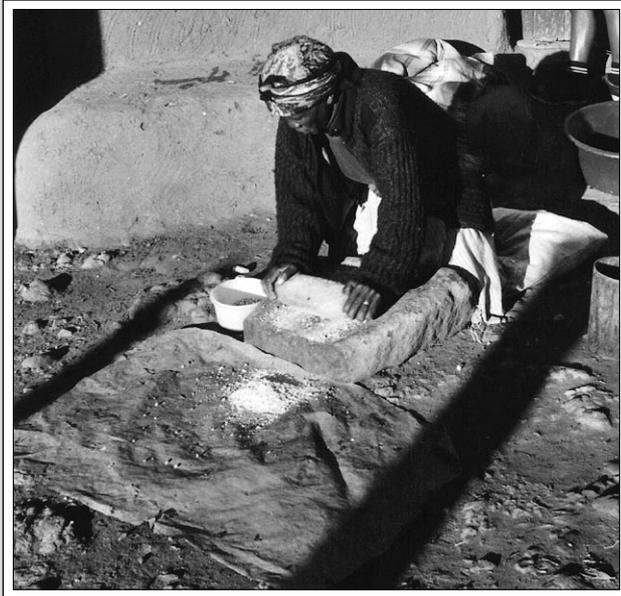
*「毎月1,000円 27日は私の国際協力の日」募金
⇒『JVCサポート募金』と名称も新たに再スタート。



暮らしを彩る道具 61

LIFEWORk ITEMS

South Africa



ひく

メイズ(トウモロコシ)を粉にひく。この粉を水でこねてふかすと主食パップになる



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係を作り出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年10回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

ご入会は、次の口座へ郵便振替にて会費をご送金下さい。

口座番号：00150-3-48365
加入者名：JVC会員係

オリエンテーション(説明会)へどうぞ

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
- 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら(会員担当)へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数【2月10日現在】合計 1,594人
正会員 644人 賛助会員 950人

E-mail

jvc@jca.apc.org

JVCのホームページ

<http://www1.jca.apc.org/jvc>

編集後記

1月18日、世界各地でイラク攻撃反対のピースバレードが開催された。ここで行動しておかないと後悔すると思い、私も銀座を練り歩き日比谷の集会に参加した。友人や家族も誘ってみたが意外に参加は得られなかった。日本では表だって自分の考えを、特に行動で示すことに抵抗を感じる人はまだまだ多いのだなぁと感じた。その敷居を取っ払い一般の市民参加を促すのがNGOのお仕事!さぁ、がんばろう。(ふ)